

シンポジウムの趣旨

テーマ：教職大学院での実習のあり方を考える —教師教育における「理論と実践の往還」を目指して—

教職大学院が発足して6年になり、高度専門職業人として「学び続ける教員」を育成するための教員養成のモデルとして、教職大学院のさらなる充実、拡充が提言されている（教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議「大学院段階の教員養成の改革と充実等について」（報告）平成25年10月15日）。それは、教職大学院の創設以来の取り組みが高く評価されていることを物語るものである。評価されたのは、理論と実践の往還を図る教育課程と実践的指導力の育成であり、とりわけ、10単位を充てられた学校での実習の果たしてきた役割は大きく、カリキュラムの中心となっている。今後、教職大学院の教育課程の特色である「理論と実践の往還」を真に有効なものとするためには、学校での実習内容の更なる改善・充実が求められる。それには、実習を単なる学校実習に終わらせるのではなく、「探究的实践演習」としての性格の重視がいられているが、そのための教育課程の改善と院生指導体制の充実が必要である。

そこで、本フォーラムでは、教職大学院教育における実習の成果と課題について検討し、今後の展望を探ることを目的とする。第1期（創設時から現在に至る）の教職大学院での学校における実習の成果や到達点を、本研究科での取り組みに即して明らかにすること、第2期（教職大学院の拡充・質の向上をめざす今後5・6年）の教職大学院での学校における実習の目標や在り方について、本研究科の特性や実情を踏まえつつ展望することの2点を課題として、議論を深めていくことをねらいとして企画した。

（竺沙知章）